

震災からの地域農業の再生、復興に向けて

飯舘村で肉用牛(繁殖)の飼養再開へ！！

飯舘村は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、全村避難となりましたが、現在、平成29年3月の一部地域を除く避難指示解除等を前に、営農再開に向けた取組が着実に進められています。

平成28年9月6日、震災前に村の農業の中心であった肉用牛(繁殖)経営が「福島県営農再開支援事業」の「営農再開に向けた家畜の飼養実証」を活用して、約5年3か月ぶりに飼養再開しました。

今回の飼養再開は、村や県など関係機関の連携のもと、実証農家である山田長清氏が避難先から村に通いながら牛舎やパドック等の清掃や修繕、空間線量率の調査・低減対策、さらには安全な飼料等の確保など国の基準等に基づく適切な飼養環境を構築した結果、実現しました。



【肉用牛(繁殖)の飼養再開】



【肉用牛(繁殖)の帰村】

また、山田氏は肉用牛との一緒に帰村を夢見て、震災当時飼養していた繁殖雌牛4頭を県農業総合センター畜産研究所沼尻分場へ避難させていたこともあり、当時の繁殖雌牛4頭とその子孫9頭、さらに導入牛2頭を含め、総勢15頭での飼養再開となりました。

今後は、この飼養実証の成果を基に、村内肉用牛の営農再開の拡大に繋げるとともに、地域ブランドである「飯舘牛」の復活など、相馬地域の力強い畜産の復興に向けて着実に取り組んでまいります。

地域農業の維持・発展のため、今こそ法人化を考えてみませんか

日本は人口減少社会となり、多くの産業で担い手不足が顕在化しており、農業も例外ではありません。特に、当地方は、東日本大震災及び原子力災害の影響から、未だに多くの方が避難を余儀なくされるなど、極端な担い手不足が懸念されています。

当部が、今年度訪問した認定農業者の皆さまからは、「農業・農村を維持するためには大規模経営が必要。」「家族経営では限界がある。集落での組織化が必要。」など、力強い経営体の誕生を望む声が聞かれました。

一方、当地方では農業経営の法人化事例が増加しており、今年度だけでも 4 件、この 5 年間で 25 件（平成 28 年 9 月末現在）の法人経営が誕生しています。この状況は、農業を取り巻く環境の変化に対応できる力強い経営体に生まれ変わるための手段として法人化が選択されたものと推察しております。

【当地方での法人化事例】

法人	市町村	構成員	経営内容
農事組合法人 A	相馬市	5 名	水稲 30ha+ 落葉果樹 0.6ha+ 作業受託 8ha
合同会社 B	相馬市	3 名	水稲 14ha+ 大豆 57ha+ 小麦 9ha+ 露地野菜 1.2ha
株式会社 C	南相馬市	5 名	水稲 30ha+ 露地野菜 3.4ha

一般的に法人化のメリットは、財務状況の明確化による信用力の向上、福利厚生の実施による雇用者の確保、規模拡大のための資金調達が有利などありますが、県は、法人設立とその経営の安定化を図るために、(一社)福島県農業会議と連携しながらコンサルティングや補助事業の活用など、状況に応じた支援を行っております。

【法人化の一般的なメリット】

制度上のメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会保険等の適用により、従事者の福利が増進 ・ 法人税制の適用により節税効果が期待 ・ 制度資金融資限度枠の拡大 ・ 農地の権利取得が可能
経営・運営上のメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家計と経営が分離され、経営管理が徹底 ・ 計数管理の明確化により取引先・金融機関等対外信用力向上 ・ 幅広い人材確保による経営継承の円滑化

相馬地方の農業・農村が本格的な復興と再生を果たし、次代を担う若者が継承するためには、経営理念を明確にしたリーダーのもと、経営目標の実現のために必要不可欠な協力者を巻き込み、規模拡大や複合化、集落営農、他産業と連携した 6 次産業化等に取り組むプロフェッショナルな農業経営体の誕生が、大いに期待されております。



写真 法人組織による大豆管理作業

新たな花き産地をめざして

相馬地方では、夏秋期のトルコギキョウ栽培と、後作として冬春期のカンパニュラなどの低温開花性花き栽培を組み合わせ、花き周年栽培による新たな産地形成を目指しております。10a 当たりの収支を試算すると、トルコギキョウでは約92万円(生産量25,000本、1本単価100円)、カンパニュラでは約60万円(生産量20,000本、1本単価100円)の所得が見込まれます。

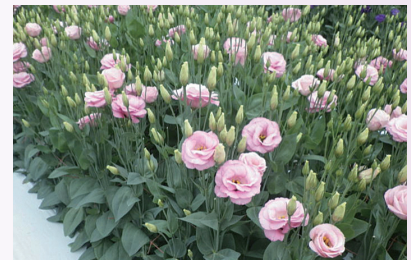
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
トルコギキョウ	半促成						■			○		◎	
	季咲き		○		◎			■					
	抑制				○	◎			■				
カンパニュラ	2月咲き		■							○	◎		
	3月咲き			■							○	◎	
	4~5月咲き				■					○	◎		

○: は種 ◎: 定植 ■: 収穫

トルコギキョウとカンパニュラの作型

栽培のポイントは、トルコギキョウでは夏場の高温対策が重要です。カンパニュラでは、電照を活用することで2~3月の早期出荷が可能となります。

花きは風評の影響が少なく、既存施設を有効に活用できることから、所得向上が期待できる品目として、力強く支援してまいります。



トルコギキョウ



カンパニュラ

たまねぎの春まき作型について

相馬地方では土地利用作物としてたまねぎの栽培を推進しており、今回、春まき作型について紹介します。

たまねぎは通常11月に定植し、6月に収穫する秋まきが一般的ですが、春まきは、端境期に出荷することを狙った新しい作型です。越冬しない作型のため、抽だいや降雪などによる欠株のリスクが低いこと、また、ほ場での栽培期間が短いため、他作物との輪作に組み入れやすいことが特徴です。

栽培は、1月下旬から2月上旬ごろにセルトレイに播種し、おおよそ60~70日間育苗して4月上中旬ごろに定植します。その後、3~4か月の栽培期間を経て、7月中下旬ごろに収穫となります。



1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月					
上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
播種						定植						除草剤散布			除草剤散布			病害虫防除						収穫・乾燥		

育苗はトンネルや被覆資材を組み合わせることで、無加温ハウスでも育苗が可能です。

施肥は全量基肥で施用し、基本的には追肥はしません。定植は、畦幅140~150cm、株間10~12cm程度の4条植えで、25,000株/10a程度を目安に植え付けます。

栽培管理のポイントは、①球肥大期に窒素が多いと病害の発生を助長するため、過剰な施肥を行わないこと、②秋まきよりも収穫期が遅く、高温・多湿条件での栽培となるため、雑草防除と病害虫防除を徹底すること、③収穫が遅れると乾燥・貯蔵中の腐敗が増加するため、適期に収穫を行うことが重要です。

農林水産分野イノベーション・プロジェクトについて

県では、生産コストの低減と安定した収益が確保できる新しい農業のモデルを構築するため、ICTやロボット技術を活用した実証試験を相馬地方で実施しております。

(1) ロボットトラクタ

水稻の超省力・大規模生産プロジェクトとして、南相馬市原町区渋佐地区の水田において、GPS等のリモートセンシング技術を活用した自動走行システム付きトラクタで、走行や作業機制御の実用性などを試験しております。



(2) 除草ロボット

遠隔操作で駆動する除草ロボットが急傾斜法面で草刈り作業を行い、安全性や省力化などの検証を飯館村前田地区で実施しており、避難地域等の長期間耕作されていない農地や畦畔等の除草管理作業への活用が期待されています。



(3) アシストスーツ

介護や物流の現場で活用されているアシストスーツを農業分野で活用できるように、カボチャの生産者や米の全量全袋検査の作業員に装着していただき、農作業における労働負担軽減効果や作業効率等の調査を行っております。

いちごのハクビシン対策について

管内のいちごほ場では、ハクビシンによる被害が確認されています。ハクビシンの被害を低減するため、生態を理解するとともに、施設内への侵入経路を確認し、侵入を防止しましょう。

【ハクビシンの生態】

- ・尾は長く体の長さと同様で、額から鼻先にかけて白い帯があります。
- ・完全な夜行性で昼間は住宅など建物の天井裏で休息します。
- ・バランス感覚に優れ木登りが得意で、用水路や側溝を移動経路として使用します。
- ・いちごやぶどう、とうもろこしなどの農作物のほか、ミミズや虫なども食べる雑食性です。



【ハクビシンの侵入経路】

- (1) 地面との隙間から…ハクビシンは5～6cmの隙間があれば侵入可能です。
- (2) ビニールを破いて…ビニールの小さな穴やたるみを噛んで穴を大きくし侵入します。破れを補修するとともにたるみなく張りましょう。
- (3) 天窓や換気扇から…天窓や換気扇周りの隙間をよく点検してみましょう。

【防止対策～楽落くん(埼玉県農業技術研究センター開発)～】

トリカルネットと電気柵を組み合わせ、絶妙な高さの柵で感電させる侵入防止技術です。

外周 200m の場合 655 円 / m で設置可能と安価で管理が容易です。

